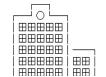
# 信州大学物理同窓会 聲影 会報

- 信州大学物理同窓会会報 0072 号(2020 年春号) SUPAA BULLETIN No. 72 ●
- 2020年3月23日発行
- ■──■ 発行所・信州大学物理同窓会事務局 (http://www.supaa.com/)
- ■---■ 〒390-8621 松本市旭 3-1-1 信州大学理学部物理教室内
- ■「旧文理学部物理学専攻」+「理学部物理学科」「理学部物理科学科」「理学部理学科物理学コース」のOB・OG&学生と教職員の会 ■
- Faceboook 信大物理 (https://www.facebook.com/ShinshuPhys)



## はじめに

ついに WHO (世界保健機関) がパンデミックと認定した新型コロナウイルス禍だが、信大では卒業式も入学式も中止。物理学コースの学位記授与式も取り止め、学位記は郵送。卒業写真も入学写真も撮影できない事態だ。3月中旬時点で、日本での終息が見通せていない。政府の対応が「後手後手」との非難は否めない。その対応に、科学的知見が薄いことに驚く。全容把握が先決で、

PCR 検査等による実態把握が全力でなされたか、クルーズ船での失敗を認めその教訓を活かしているか、あげく、専門家の意見を聞かず全国一斉休校の総理要請…。

そんなさなか、当会設立最大の功労者、 松原正樹さん(文理 10)が逝去された。氏 の勤め先事務所(新宿)をお借りし、夜に集 まっては、設立の打合せを重ねた 20 年前 のことが懐かしい。ご冥福を祈る。(高)

====《巻頭のこの1枚》 **三春滝桜**==



■撮影:倉田富二(理学3S) 日本三大桜の一つ、「三春滝桜」を訪ねた。多くの人を魅了し、惹きつけてやまない名桜である。その周りで人々は、思い思いに佇み、スマホを向け、インカメラで自分も映し込み、想い出を刻んでいる。このひと時のメモリーは、1000本以上という「滝桜」の年輪のどこかにも刻まれているに違いない。 ■撮影日:2019.4.22 ■撮影地:福島県田村郡三春町

## [ I · N · D · E · X ]

第   23   回   信   州   大   学   物   理   会   総   会   (2020 年 5 月 23 日開催)のご案内
(2)
◆   退   職   に   際   し   た   雑   感   ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 竹下 徹 (3)
◆ 竹下徹先生の御定年に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 大下 英敏 (12)
◇【連載 宮地先生の展望室 第7回】草木花の歳時記 ・・・・・・・・・ 宮地 良彦 (13)
■ 松原正樹さん どうか安らかに ① 追悼 ◆ 松原正樹君を想う・・・・・・・三上 浩佳 (15)
② 追悼 ◆ 松原正樹君の想い出・・・・・・赤羽 徳英(18)
◎ 大皿盛りの同窓会で多事争論が面白い(県の森音研同窓会)・・・・・・・・羽田 智惠子(19)
<ul><li>◎ 《 第 10 回物理学生への就職セミナー特報 前編 》 それぞれの感想</li></ul>
【就職委員から】通年採用やインターンの見直し(企業側)が始まるなかで・・・・加藤 千尋 (24)
【①実業界若手から】製品開発の現場と就職活動で重きを置いた事・・・・・・中島 寛人 (24)
【②実業界中堅から】社会人として人生をスタートするための心構え・・・・・・今関剛(25)
【③実業界ベテランから】会社に利用されるな、会社を利用せよ・・・・・・加藤美孝(26)
【④聴講学生から】三つの疑問がやわらぎ、たいへん有意義でした・・・・・・三島 勇斗(26)
【⑤聴講学生から】理学部は就職に不利と言われてきたけれど・・・・・小池由 稀奈(27)
【⑥工学部の先輩からのアドバイス】理学部卒と工学部卒の違い ・・・・・・戸田 泰行 (27)
◎ [リレーコラム⑩] 想いを半世紀前に遡らせて・・・・・・・・・・・・・飯沼 和男 (28)
○ [
<ul><li>◇ 【 卒業にあたり信大生活を振り返る 】 あっという間の4年間 ・・・・・・・ 松下 凌大 (31)</li></ul>
● 成績優秀者の表彰(32)
◇   I   N   F   0   R   M   A   T   I   0   N   第2回信州大学大学史資料センター企画展(32)
◇【News】理学部同窓会「会計問題検討会」を設置して赤字問題を討議(33)
◇ 《再録》「同窓会費」『会計細則』決まる!(34) ◇ 編集後記 (34)

# | 第 | 23 | 回 | 信 | 大 | 物 | 理 | 会 | 総 | 会 | の | ご | 案 | 内 |

新年5月に開催の当会23回総会の概要が固まりましたので、お知らせいたします。 松本と東京で交互に開いてますが、今回は東京での開催。場所は東京駅の近くから 新宿駅近く(徒歩10分)の新宿ワシントンホテル(新館)に会場を移しました。記 念講演会の講師に今年度で退職される竹下徹先生にお願いすることになりました。 大勢集まって旧交を温めあいましょう。

皆様におかれましても、ぜひご出席いただきますよう、お勧め申し上げます。

記

(1) 開催日: 2020年5月23日(土)午後2:00~5:00 (予定)

○受付 午後1:45~ (予定) ○年次総会 午後2:00~2:30 (予定)

○講演会 午後2:30~3:20 (予定) ○懇親会 午後3:30~5:00 (予定)

- (2) 会場: 新宿ワシントンホテル新館(東京都新宿区西新宿3-2-9 Tel.03-3343-3111) https://washington-hotels.jp/shin.juku-annex/
- (3) 講演会講師: 竹下 徹(信州大学理学部理学科物理学コース高エネルギー物理学研究室 教授) ○演題:「自然の理解(素粒子物理学)の進展と私の関わり」
- (4) 参加費:10,000円(30歳以下7,000円)

【集会の自粛要請から、総会の中止または延期の最終決定は4月下旬に判断し、発表します。】 ------

## 退職に際した雑感

## 【 物理の同窓会の心の広い方々を想定して雑文を 認 めました 】

1991年に信州大学教養部助教授として赴任後、理学部に移って高エネルギー物理学研究室を創設された竹下先生。この30年間、研究と教育に邁進されたが、定年退職を迎えられる。「最近は『宇宙を創る実験屋』と呼んでいます」とおっしゃるご自身を振り返っていただいた。おつかれさまでした。そしてこれからも宜しくお願いします。

竹下 徹 (信州大学理学部理学科物理学コース 高エネルギー物理学研究室 教授 信州大学 卓越教授 /松本市在住)

### ##「熱心のみ、人生を永遠にする」この言葉は私の人生を映す ##

大学の教員としての職を、定まった年を持って終了することになり、退職と呼ばれる事態になりました。そのこと自体は、私には自然に受け入れられます。一つの区切りで あることに違いはありませんが、この文書のような要請が来ること自体が、その区切りの大きさを自覚せざるを得ません。私にとって、年齢で決まる立場の変更は、もちろん組織の若返りの根拠となる節目ですから、老人の弊害より益の方が多いはずです。

大学の組織にいくばくかでも関わってきた私にとって、学部として「シニアパワーを使おう」と言ってきた張本人としては、これから「言われる」役になる訳です。過去にこだわった文書が本稿の目的です。とはいえあまり過去のことは、覚えていないので、ここに書くことも、私の怪しげな記憶を辿って書き



ますが、事実ではない記憶の可能性があることを期しておきます。

人生を決めた 18 歳での物理の学生になる時の判断は、はっきりとしてません。私は、多分の工学的素養を持っていました(小学校時代から半田ごてを使って、ゲルマニウムラジオから始まり、中学では真空管アンプを作っていました)。中学の先生にオルバースのパラドクスを聞かれ、なぜか、宇宙膨張と答えた記憶(怪しい)だけはあります。高校の物理の授業が最悪であったにも関わらず地元の大学の物理学科に進みました。なぜ物理を選んだのかいまだに不思議です。

私が物理学科の学生であった時の記憶で、唯一残っているのは、なぜかチャーム クオークの発見を祝う会です。素粒子理論の研究室にいたはずですが、タイミング が合いません。こんな程度の記憶です。

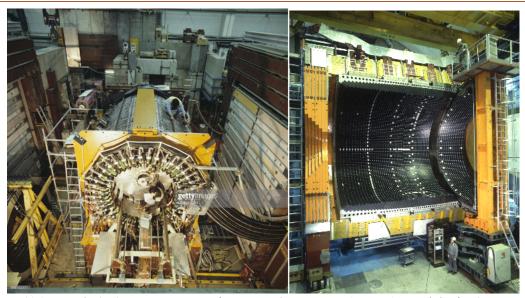
そういえば、私の少ない記憶の中に(記憶は私の場合、大抵絵のような映像として残っています)小学校にかけてあった武者小路実篤の色紙があります。「熱心のみ、人生を永遠にする」という記憶があります。ところが、今インターネットでなんでも調べられる時代を利用して、調べてみるとこの名言はゲーテのものであるという一件しか該当しません。記憶の不思議としてください。ただこの言葉は、私の人生のようです。

さて、私が研究者になったのは、1982年4月のことです。その前の月に、博士課程を終了したらしい(記憶がない)ので、卒業と同時に大学の助手に採用されるというとても運のいい奴だったようです。助手としての仕事は、海外の素粒子物理学の研究所へ赴き、実験を遂行することでした。おかげで、採用されて3ヶ月後には、西ドイツ(当時はまだドイツは統合されていませんでした)のハンブルグ市にあるDESY研究所に赴きました。

### ## 助手の時に結婚、広島での式に小柴昌俊先生も列席いただく ##

東京に3ヶ月暮らしましたが、その間に結婚しました。当時の習慣として、当時の私の上司(?)である、小柴昌俊先生を広島での挙式に列席していただいたことは覚えています。結婚式の1週間後には、ハンブルグに居ました。妻は1ヶ月後にハンブルグに来てくれました。当時は、インターネットは存在せず通信手段は電話と FAX だけでこんなことができたのは不思議です。

ハンブルグには、電子陽電子衝突型加速器 PETRA が稼働しており、私たちのグループでは JADE 実験の測定器のアップグレードが進行中で、私の仕事は新しい電磁カロリメータ用の鉛ガラスカウンターの較正とインストレーションでした。知らない土地で商習慣の異なる企業から部品を買い入れたりして、仕事をしました。当時の実際の私たちのボスの言葉は、「君らは、正規軍だ、日本ではゲリラ戦を挑んでいる」



▲(左) JADE 実験 (ドイツ Hamburg 市 DESY 研究所 PETRA 電子陽電子衝突加速器) 1983 年頃の写真。鉛ガラス電磁カロリメータ測定器の一部の入れ替えのため開いている。 日本チームがハンブルグで素粒子実験をやっているという Stern というドイツの雑誌 の記事のために撮られた写真

(右) OPAL (スイス Geneve 州 CERN 研究所 LEP 電子陽電子衝突加速器) 1988 年頃の写真鉛ガラス電磁カロリメータ測定器の片側完成近くの写真。 CERN 研究所の写真チームが色々記録写真を残してくれた

その後、DESY 研究所での仕事は、次の電子陽電子衝突型加速器である CERN 研究所の LEP に移っていきます。何度か、CERN との間を往復しながら準備を進め、ハンブルグに住んでいたメンバーが次々と CERN に移っていきました。スタッフとしては、私の一家が最後に CERN 研究所に引越ししました。1985 年初頭のことです。ここからの私たちの仕事は、LEP 加速器での OPAL 実験での電磁カロリメータの準備になりました。

装置は再び鉛ガラスと光電子増倍管のカウンターです。1万本の製造と組み上げと較正を4年間掛かって完成しました。LEP加速器の運転が始まり最初の衝突事象を捉えて加速器の運転室に報告した夜のことは、記憶にあります。

さてLEPの始まりだ、と思った時に、日本に帰れという指令が私にでました。最前線から後方支援部隊への配置転換です。私たち一家4人は、東京郊外の公務員住宅に転居しました。これから1年間は事務対応が私の仕事になりました。学部の事務の人からの物理学研究の中身に関する問い合わせが大抵夕方来ます、これに答える説明書類を作って翌日朝までに届ける毎日でした。

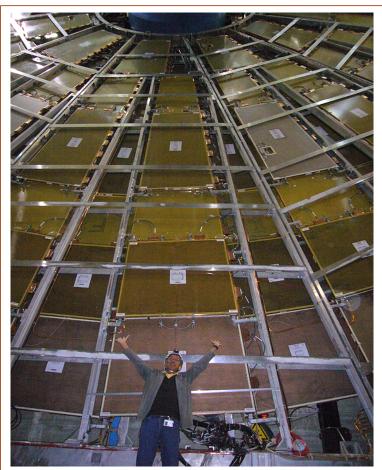
#### ## 知らない土地、信州で素粒子実験を一人で立ち上げる仕事 ##

こんなことや、自然のない環境で東京は子育てをするところではないという思い

から、どこか田舎に移動する決意をして、仕事探しが始まりました。運良く信州大学教養部に働き口を見つけて、採用されました。知らない土地で素粒子実験を一人で立ち上げるのが次の仕事になりました。

信州大学にやってきたのは、1991年4月の初めです。ここでは今までやったことがない仕事が、授業でした。9年間の助手の時代は講義をすることはありませんでした。実験の担当さえありませんでした。何しろ8年間ずっと海外の研究所で、研究の推進をすることが仕事だったのです。こんな大学の助教という立場は他大学にはありませんでしたが、私の属した組織では当たり前のことでした。教養部なので1年生向けの授業は、週4コマの工学部向けの力学でした。このために小出昭一郎の教科書に導かれながら講義ノート一冊を作りました。

今思い返すと、独善的で一方的な講義に終始していた気がします。結構難しい式をフォローして学生の理解をあまり顧みなかった反省があります。確かに高い内容の教科書で、学生がフォローする手助けのつもりで授業をしてましたが、学生にはちんぷんかんぷんだったかもしれません。私自身にはとても新鮮で理解した満足感が得られる仕事でした。後で思うと教員が満足しても仕方ないですね。



▲ATLAS(スイス Geneve 州 CERN 研究所 LHC 陽子陽子子衝突加速器) 2007 年の写真。前方μ粒子トリガー測定器の片側完成の写真。自分で作ったぞ、みたいな大きな万歳中

信大教養部はテニス コートの隣にあり、忘 れていたテニスをお昼 休みにプレーできる楽 しみが生まれました。 当時は医学部のコート だったので、医学部の 先生方とテニスを通じ てお知り合いになるこ とができました。以来 テニスにはまって現在 に至っています。退職 後の大きな楽しみにな る可能性が大ですが、 歳と共に体が動かなく なる危惧との戦いとな りそうです。

いつの頃からか、理 学部の物理の学生の面 倒も見るようになりま した。一人だけの研究 室(と呼べるかどうかわかりませんが)に4年生が数名、時とともに修士の学生が現れ、時々博士の学生が、共通教育棟の4階の端っこの物理の実験室を占めるようになりました。学生が何名いても、学生に面白そうな課題を与えつつ研究を楽しむスタイルは、この頃から自然と私の中で育っていきました。もちろん私の興味につられて集まってくれた学生たちなので、こんなことができたのだろうと思います。教養部解体と学部への配属という変化が起きました。しかし、理学部に移っても研究室は相変わらず共通教育棟にあり、学生も理学部から離れた場所での生活でした。教養部という新天地に移ったので、心機一転何か新しい研究を始めようとしました。何しろその前のほぼ10年間 我が家では1ost '80 と呼んでいます 1982年から1990年までずっと海外で情報の伝わらない世界に住んでいました)日本のことを全く関知していませんでしたし、JADE実験、OPAL実験に100%専念していましたので他の実験に関与したり、考えたりすることはありませんでした。

しかし、全く悩むことはありませんでした。ここまで10年間電子陽電子衝突実験に携わっていたので、自然に次の電子陽電子衝突実験として企画されていた、JLC(Japan Linear Collider)計画に加担することにしました。そしてまた自然に測定器としてカロリメータ(衝突実験で放出される終状態の粒子のエネルギーを測定する装置)を選択しました。

### ## ロシアのアイデアを日本の技術で作り上げた光半導体素子 ##

既にカロリメータの技術的選択がなされ、(プラスチック)シンチレータを用いる 形式の開発が始まっていました。今思えばこれがその後の30年間の測定器屋として のターニングポイントになりました。そして、今もこれからも関わっていく技術と の付き合いの始まりでした。

プラスチックシンチレータは私の業界でも比較的古い技術であり、すでに高い完成度がありましたが、シンチレータの発する光(シンチレーション光)を捉える技術は、光電子増倍管以外は完成度の低いものでした。ここから色々の光センサーを試す作業が始まりました。

その後私たちは、ロシアのアイデアを日本国の技術で作り上げて、十分に使える 光半導体素子を手にすることができました。私はこの技術の概念を、光半導体製造 会社の副社長に突然初めて電話して開発と製造をお願いしました。話したこともな い人にそんなことをやっちまいました。初めは断られましたが、半年後にこの光素 子を手にして、信号を見たときの感動は忘れられません。

そして私たちは光半導体センサーで世界と伍して行けるようになりました。今や 日本はもとより海外の研究者も採用する光センサーとなりました。まだまだ開発の 要素は残されていますが、その始まりに大きな関与をすることができたのは、また とない経験でした。

この素子の開発当時から放射線医療・診療装置への展開は、期待されていましたが、自分でやるしかないだろうと考え、医学利用は今も研究の一翼を担っています。ガン発見装置である、PET や SPECT などの新型には、私たちが開発した光センサーが使われるようになってきました。

## ## 陽子陽子衝突実験の難問解決に向け、3度イスラエルを訪問 ##

また脱線しました。話は、私が信大に移ってきた直後の判断の一つが次世代電子陽電子加速器計画 JLC とそこでの実験装置のカロリーメータ開発研究に乗った話でした。もう一つ、陽子陽子衝突実験である CERN研究所の LHC 加速器とその実験である ATLAS 実験への関わりは、多分に外力?によるものでした。それは前に所属してた組織の知り合いからの誘いでした。



▲2010年夏、宮地先生を囲んで暑気払い会。青シャツが筆者

新しい大学に移ってきて「さあ何をしよ

うかな」と思っているところに来た誘いに乗らない手はありませんでしたし、渡りに船でした。陽子陽子衝突実験の最大の問題は、衝突頻度の25ns 毎と陽子に起因する放射線環境で、問題は主に大量の中性子でした。測定器は、素早く反応し中性子耐性を有していることが求められました。

その後約10年に渡って、私たちは、この性能を達成できる装置の開発研究を行い、さらに後5年かかって必要な大量の装置の製造という難題に向き合いました。開発研究では、この装置(TGC: Thin Gap Chamber)の概念と基本技術を有していたイスラエルのグループと親しく接するだけでなく一緒に仕事をすることになりました。おかげで3度もイスラエルを訪問し改善や制作技術の熟成を行いました。

実は相手は OPAL 実験の共同研究者であったイスラエルのグループでした。 OPAL 当時はライバルだった人たちと、ATLAS では身内になり大変な変化が起きました。 ライバルには強く反発し自己を主張するが、身内には限りなく優しい人々の豹変に 驚きました。今でも身内でいい仕事を彼らはしてくれています。

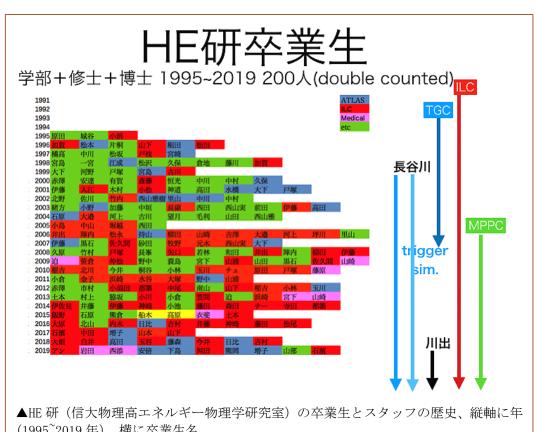
信州大学に来て、一人になってそれも研究室を一人だけで展開するようになって 2つもの研究の柱を持つことをいとわなかったのは、前の研究組織の経験によると ころが大きいと思います。今思うと前の所属組織は大きく、人も多かったので、複 数の研究計画を動かすことができました。それを独り身にも関わらず、ATLAS と JLC (JLC は今は ILC となり、Japan から International になりましたが、まだ決定的 な最後の一撃が足りません)という二股を掛ける研究体制に自然になったことは、 少々やりすぎたかもしれません。さらに今や医学利用も含めると3つ目が動いてい ます。きっと私の気の多い性格のせいだろうと考えいます。

### ##「面白そうな実験考えないか?」に大志を抱く学生は少ない ##

大学での研究は、学生が教育を受けるという立場ながら実働することにより進ん で行きます。研究と教育を両輪とする大学の教員にとって「いいところ」ですが、 学生にとっては、迷惑かもしれません。教員のやりたいことを学生が分担して実行 するときは、特にそうかもしれません。なるべくなら学生の自由意志に委ねた研究 を進めたいところです。

大学での研究は、自由意志に基づいた創造性が求められています。これを最近の 学生に求めるのは酷かもしれません。確かに研究室に配属になる4年の学生にとっ て何もわからない世界に入ってきて、何を研究しましょう? と教員から問われて も答えようがないでしょう。

また研究室は年度ごとにリニューアルします。毎年新しい学生が入ってきて、同 時にいろんなことができるようになった学生が出て行きます。研究室運営という観 点から持続性を維持することは、学生を縛ることにもなるため、当初、私はあまり



(1995~2019年)、横に卒業生名

好んで持続性を強調しませんでした。あるいは無視していました。

しかし最近は、学生に安心できる基礎技術という安定感を与えることも一つの方 法かなと考えていますし、学生にも受けがいいようです。逆にいうと、なんでもい いから「面白そうな実験考えないか?」と聞いても大志を抱く学生は少なくなって います。教員が進めている研究の持続性に乗っかってくる学生が多くなりました。

これは教員は助かるのですが、少々不満です(贅沢でしょうか?)。おかげで最近は意図的に、教員の研究の一部(あるいは全部)を学生が実働して成果を求めることになってきています。その結果「こんなことをこうやってくれればいい」と口を出して言いたいのですが、ぐっとこらえる日々です。ここは少なくとも学生の自主性に任せたいのです。学生が自分で考えて進んでいって、私たち教員がその進みにフィードバックを掛けたり示唆を与えて研究を進めることが私のやり口になっています。そのため研究の回り道もしょっちゅうです。

一方、教員は自分では動きにくくなっています(多分自分でやってもそんなにうまく進められないのでしょうが、想いは空回りします)。また教員は授業やセミナーを持ちつつ、学部や大学の仕事は突然やってきた短い時間での書類提出が求められており、息の長い研究に腰を据えて入り込むことが困難になっています(これって言い逃れでしょうね、長い春と夏の休みがあるじゃないかと言われそうです)。

ここが学生の出番となっているのです。教員は研究課題を提案するだけかもしれません。実際の成果は学生が実験して出すという構図です(私の実験分野の実態です)。ただ教員のしっかりしたチェックがないと、おかしな結果がまかり通ることがあり、研究者としては要注意です。学生と真摯な信頼関係にないとこの構図での研究はうまく進みません。最近は従順な学生が多くなってきているので、成立する経験的手法です。

この結果、ATLAS 実験では、ミュー粒子用トリガー装置を教員とスタッフ(研究所や他大学の教員)で企画・開発・研究し、製造し、設置し、運転することにこぎつけました。今はちゃんと動かすことと、装置の改善を行うことが ATLAS に対する責務となっています。私の研究分野である加速器を用いた素粒子実験の特徴は「巨大さ」かもしれません。従って信州大学の我々のグループだけで何かを成し遂げることはまずありません。必ず複数の研究組織の連合体が担当することになります。これは一般社会にはない不思議な組織です。指揮命令系統でつながりの無い単なる複数の研究組織からきた好き者の集まりが上下関係なしに、実験装置を作り上げ運用するまでこぎつけなくてはいけません。

#### ## ヒッグス粒子の発見により完成を見た素粒子標準理論だが… ##

ここは会社とは全く異なる規範で構成され自律的に動いて行きます。 ATLAS のミュー粒子装置は面積にして 1600m2 あり、限られたお金で作ることを国と約束した結果、大学院生の労力を駆使して建設されました。 多分に犠牲的な感情を持っていた学生もいると推察します。 特に日本の大学や研究所には、欧米の研究組織のようなエンジニアやテクニシャンと呼ばれるその道のプロがいません。

お金があれば企業を使って専門家の仕事を頼みます。しかしお金がないと大学院 生がその役を割り振られることになります。大学院生は、物理をやるつもりで来た のに畑違いの開発をやらされるといったことが起きます。教員も海外とは全く異な り、自分でハンダつけをしたりして、「物理実験」に関与することになります。戸塚 先生も同じようにボヤいてました。

ヒッグス粒子の発見により完成を見た素粒子標準理論は、私たちの全てを理解したいと考える究極の理論ではありません。例えば素粒子の質量の値を説明することはできません。ヒッグス粒子が質量起源の粒子だと言っても、素粒子の質量値をヒッグス粒子との結合定数に置き換えただけで(これはこれですごいことです)、パラメータの数は同じです。この例でいえば次に知りたいことは、なぜここの素粒子の質量この結合定数を持っているかを説明することです。

そのために素粒子実験屋としては、ヒッグス粒子の解明が最善の方策だと考えます。私の大学組織人としての経歴は、これで終了しますが個人の物理屋としてはまだ何かできると思っています。ATLAS 実験と LHC 加速器はあと数十年は実験を続けることが CERN 研究所の方針です。

ATLAS 実験は、たくさんのヒッグス粒子を作って、ヒッグス粒子の理解を進めます。つまりたくさんのヒッグス粒子は標準理論から予想される通りに崩壊するのかどうかを確かめます。陽子陽子衝突実験であるATLAS 実験では初期状態が陽子の中のどのクオークあるいはグルーオンの衝突なのかがわからない問題があります。一方でILC にはこの問題は存在せず問題に正面から迎い向かうことができます。この一年ぐらいが、我が国がILC を誘致するかどうか



▲2020年2月5日に竹下先生への信州大学卓越教授称号付与 式が行われた。左は濱田学長、右は武田理事(信大 HP より)

の瀬戸際で、私個人としても退職後の楽しみが大きくなるかどうか期待を持って見 守っています。

長々と私の30年、いや50年を書いてきました。人生100年(かどうか疑わしいですが)の後半の楽しみが素粒子物理学にはまだまだ眠っていて、若い人たちが(私

## ■ 竹下徹先生の御定年に寄せて

大下 英敏 (96S/信大工学系大学院博士課程修了 高エネルギー物理学研究室 ・ 同研究室世話人 高エネルギー加速器研究機構 つくば市在住



## □□ 地方大学でありながら国内外の研究機関 と活発に連携した活動が際立っていました!

この春、竹下徹先生が定年を迎えられ、30年近い研究生活に一区切りつけることとなりました。私は学部4年から博士課程まで9年にわたって、竹下先生に指導していただきました。おそらく竹下先生が指導された学生としては、私が最も長い期間、お世話になりました。もう20年以上も前の話にな

ります。当時の竹下先生は、一種独特な風貌(毎日のテニスによって日焼けした体育会系の体つきと元イタリア代表 FW のロベルト・バッジョを真似たという後ろ髪を少し伸ばしたスタイル)に加えて、モトクロス風のバイクを乗り回すという噂もあり、物理科学科の教職員の中でも圧倒的な存在感を放っていました。

研究室(現・高エネルギー物理学(HE)研究室)としても、地方大学でありながら国内外の研究機関と活発に連携している様子が際立っており、特に ATLAS 実験(Higgs 粒子発見による 2013 年のノーベル物理学賞)や ILC 実験等の国際共同実験における検出器システムの開発を得意としていました。私を含め多くの学生が茨城県つくば市にある高エネルギー加速器研究機構に送り込まれ、Thin Gap Chamber (TGC)の量産等に携わりました。TGC は畳ほどの大きさを持つ大型のガス放射線検出器であり、負電極として導電性のカーボン塗料が塗られているのが特徴です。

信州大学を含む ATLAS 日本グループは TGC 量産の 30%に相当する 1,100 台を製作したのですが、それらのカーボン塗布作業のほとんどが HE 研究室の学生によって実施されたことは余り知られていません。 竹下先生も時折、松本からやって来ては、学生と共に作業されていました。 個人的には長期にわたって指導していただきましたが、私が出来の悪い学生だったこともあり、教わったこととして、「ネジは押し付けて回せ」等の物理とは関係のないことしか覚えていません。 実際に教育されないことに不満を募らせた時期もあったのですが、教育された内容は残らず、自ら学び得た内容だけが残っている今を考えると案外と適切な指導を受けていたのだと感じています。

## □□ 竹下先生、退職後の第二の研究人生を謳歌してください

私の立場からはだいぶ生意気なのですが、研究者としての竹下先生はフェアでした。フェアという概念は少し曖昧ですが、例えば、測定されたデータに対して様々な視点から検証し、時として自分たちに都合が悪い結論となったとしても客観的事実の積み重ねによって得られたものを良しとするような姿勢だと思います。実験という客観的手法は嘘を付きませんが、実験者の失敗をそのまま含んでしまうことが多々あります。実験者としての優劣は正しい結果を得る実験を遂行できるか否かに掛かっている訳で、やはり正しい実験をおこなうためには、実験者自身がフェアでなければならないということは竹下先生の下で学びました。

私は卒業と同時に物性分野へ移りましたが、相変わらず検出器開発を続けています。最近、竹下先生が国内のパイオニアの一人でもある Multi-Pixel Photon Counter (MPPC) を用いた中性子検出器の評価をする機会があったのも、何かのめぐり合わせと感じています。

年始にいただいた賀状には、「退職で自由をゲットします」と力強いお言葉を記されていましたので、これまで以上にお好きな研究に没頭されて、退職後の第二の研究人生を謳歌されることを願ってやみません。



# 宮地良彦先生の 展 望 室

## ■ 第7回 ■ 草木花の歳時記

2020.2.23

宮地 良彦 (元信州大学学長/名誉教授 物理同窓会名誉顧問 松本市在住)

\_===\_ 【 大学を去る前から俳句を始められた先生にとって、植

- ( ^^) 物に関心の薄かったことがウィークポイントと実感され
- o-o-)) たという。そんな苦境を助けるかのように、故清水建美 先生から、ある書物が贈られて来て……。】

お恥ずかしいことだが、私は全くの植物オンチである。小学校の理科の時間の 最初の授業で出会ったのはアブラナ。なあんだ、菜の花のことかと多寡を括って



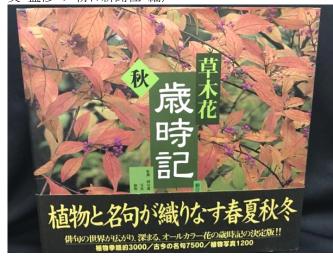
なんの勉強もしなかったのが間違いのもと。以来植物は私から遠い存在となってしまった。

ところが定年を目前にして俳句の道に入れてもらった私の困ったのは、草花や木の名前が季題として挙げられても、その実際の姿がほとんど浮かんでこないということであった。こんな私の悩みを見透かしたかのように、清水建美先生が「草木花の歳時記」を送ってくださった。

春夏秋冬4巻にわたるこの植物歳時記は、朝日新聞俳壇の選者による選句とともに、大判の写真と懇切な解説により、それぞれの草木花の生き生きとした姿を目の当たりに見せてくれる。

清水先生は植物分類学者としてこの本の監修と解説を担当されているのだが、その深い学識が随所に散りばめられている。例えば、万葉集に萩は百四十四首詠まれて草木の第一位を占めること、ハンノキを描く田山花袋の「田舎教師」の引用、タンポポの命名が頭花の蕾を鼓に見立てた音の連想から生まれたとすることなどのほか、俳句に登場する植物名の漢字表記の分かりにくさや中国名との混同と誤用のご指摘も多い。

▼『草木花歳時記』(著者 稲畑汀子, 木原浩, 清水建 美 監修; 朝日新聞社 編)



清水先生は信州大学教養部から金沢大学理学部に移られたが、数年前に亡くなられた。この本で俳句が直ちに上達するというわけではないが、私のような植物オンチにとって本当にありがたいシリーズで、清水先生に感謝しながら繰り返し読ませていただいている。



# 松原正樹さん どうか安らかに

文理学部生の特長といえば、まじめで勉強家、そして議論好き、おまけに面倒見がいい。そのように感じられますが、その代表的な方が、松原先輩でした。3月8日早朝、肺のご病気で息を引き取られました。文理10回(1961年)卒で、松崎研究室。オリンパス(株) に入社され、レンズの設計に取り組まれました。

当会の設立にも大きく貢献され、長く副会長、会計監査役、会 報編集委員を勤められました。享年 81。ご冥福をお祈りします。

## ■ 追悼 ◆ 松原正樹君を想う ■

三上 浩佳 (文理 10 回卒/群馬県立医療短期大学名誉教授 群馬県桐生市在住)

この3月9日、本会事務局長の髙藤さんから電話をいただき初めて松原正樹君の 訃報に接した。俄に信じ難いので翌日を待ってご自宅に電話してみた。ちょうど奥様が電話口にお出になって、「いま、お葬式から帰ってきたところ」との由、やはり そうか、と信じざるをえませんでした。丁度、音研(文理学部音楽研究会)OBの件 で例の独特の出だし「マツバラです」という電話がかかってくるのではないかと思 っていた矢先のことです。それまでお元気な姿しか思い浮かびませんでした。お葬 式は家族葬で執り行ったと聞いております。



彼は、本会の設立当初から現在に至るまで運営に深く関わっており、根建会長のもとでは副会長の重責を全うし、役員を退いた後も引きつづき会報の編集委員としてホームページの充実に取り組んできました。一方では、文理学部時代からの音研のリーダーの一人でもありましたので、音研 OB の私は二重にお付き合いをさせていただいたことになります。私にとって、この訃報を受けたとき、「・・・そんなに急いで逝くなよ。順番ってなものがあるんだよな。・・・」とつぶやいたほどです。これが私の本当の気持ちでした。彼は、確か八十二歳の私より一歳か二歳年下だった筈です。

想えば、松原君とのお付き合いは昭和33年春、県の森の思誠寮から始まります。 当時の思誠寮は北寮、中寮、南寮それに厨房付食堂の4棟から成り立っていました。 新入生はそれぞれ分散して上級生と同室となるよう部屋を割り当てられたので、当 時は互いに行き来したという印象はありませんでした。数少ない同期生でもあった し、食事の時はほとんど同時に食堂に集まって来るので面識があるという程度でし たが、2年次に専攻が決まることになると、受ける講義や実験はほとんど同じだっ たし、同期生も4人と少なかったので、これ以後は付き合いが深くなって行きます。 3年次の後半から物理教室の一角にあった研究室と称するたまり場に入ることを許 され、物理のこと以外にもいろいろな話で盛り上がったものでした。4年次になっ て、彼は松崎先生のもとで、確か電子回路に関係したことではなかったか、その卒 業研究を立派にやりとげられました。

教授一人に対して弟子が一人、何と恵まれた学生生活ではないですか。今思えば夢のようなことです。卒業を迎える頃には、入学時には先輩であった学生がいつのまにか同期生になっていたり、入学時に同期生であった学生が卒業時になると後輩になってしまうというような多様な学生の出入りの中で、入学時と同じ顔ぶれは彼だけになってしまっておりましたので、ことさら親近感を覚えたことを思い出しま





▲(上)1998年5月30日に都内で開かれた信大物理卒業生の記念すべき第1回会合。50人ほどが集まった。中央に松崎先生と宮地先生、そして写真の左端に松原さんが写っている。(下)2017年5月27日に松本で開催された第20回総会あとの二次会。中央宮地先生の左隣が松原さん、その左が三上さん、右端が赤羽さん

4年で卒業できたのは かなりの少数派だったう えに、彼が4年間思誠寮 での勉学を全うしたこと に対して私は深く敬意と 尊敬の念を抱いておりま したし、現在もそう感じ ております。寮長まで務 めたのですから立派なも のです。当時は、寮内に は5年生、6年生がごろ ごろ居ましたから、4年 で卒業なんて稀有に感じ るほどだったのです。早 くから寮を逃げ出した私 にとってはどうやっても 彼の真似はできっこあり ませんでした。加えて彼 は、木曽御嶽山の山裾、 長野県でも言ってみれば 僻地に数えられるでし

ょう旧開田村(現木曽町)育ちで、幼少の頃から勉学には恵まれたとは言い難い環境にあったろうことを勘案してみるに、本当の秀才というのは彼のような人のことを言うのだと思っております。

音研といえば、2年生の頃から始まった部活動でした。恰好な空き部屋が見つかったので、講堂の物置から勝手にドイツ製のピアノを運び出して据え、他に思い思いの楽器を持ち込んでそれぞれの音を楽むというような部活でした。彼はもっぱらピアノを弾いており、難曲をもこなしていたように記憶しております。定期発表会には所属する部員全員が合唱(男声合唱)にも加わることになっていたので彼と一緒に歌った曲もかなりあった筈です。近年になって、音研の 0B 会で彼と顔を合わせたときには、「よー、元気かい」とやりあい、互いの元気を確かめあうこともできました。今年の秋、音研の 0B も現役の学生合唱団に交じってステージを踏むことが企画されているようで、彼と一緒にハモれることを楽しみにしておりましたのに無念至極です。

彼が卒業してオリンパス光学工業 KK に入社後は、生涯オリンパスマンを貫き通し、 レンズの設計に一生を捧げたことは彼の誇りだったのではないでしょうか。 定年退 職後もご自宅でレンズの設計を続けていたようで、よほど性に合ったライフワーク を過ごしたのではないかと思っております。まさに幸せ者だったのです。

数年前、文理学部卒の会員に限って消息調査を行ったことがありましたが、彼からは「健康で過ごしている」と回答してきておりましたし、本会のメルマガ編集会議にも欠かさず出席していたようなので、病も急に襲ってきたのではないかと想像しておりました。でも、奥様のお話では、「16年ころ(たぶん西暦でしょう)に医者から重篤の旨の話があったので覚悟はしておりました」とのお話にはびっくりです。「もう少し早く判かっていたらこうはならなかったのでは、レントゲンの写真が良くなかったようです。」と残念がっておられました。このことが肺炎の発見の遅れにつながったようです。昭和45年から65歳の定年まで30年余りそのレントゲンを扱う診療放射線技師の養成に携わってきた私にとって何か叱責されたような思いにさせられ、「けしからんですな」とお返しするのが精一杯でした。私だけではないでしょう。われわれの仲間も彼は元気に過ごしていると信じていた筈です。しかしたいぶ前から病魔と闘っておられたのですね。彼はそれをおくびにも見せず気丈に、しかも終始和やかに、笑顔を絶やすことなく振る舞っておられました。正に男の見本みたいな人でした。

ずいぶん昔のことになりますが、「ご先祖から開田村なの」と彼に尋ねたことがありました。「満洲からの引き揚げ者だよ」と言っていたことを思い出します。太平洋戦争のさ中に引き揚げるということはなかったから、戦後の引き揚げということになるのでしょう。私事で恐縮ですが、私の父も満洲に渡ろうと思っていたようです。妹に満洲の洲をとって名付けた程です。当時は未開の大地に大勢の人が憧れていたようでした。彼の言ったことが確かだとすれば、彼はかの地で生まれたか、少なくとも幼児期を過ごしたことになります。でも、彼はそれ以上多くを語ろうとはしませんでした。満洲での生活もさることながら引き揚げ時の過酷さについては文字や映像で見知っていましたから、彼が置かれた境遇についてもいかばかりかと思いを巡らすことができるのです。この体験こそが彼の人となりの心髄を形作ってきたのではないかと思っております。

彼にはワインが合いそうです。そう多くはない仲間とゆっくりロゼなんかのグラスを傾ける。人の話に楽しげに耳を傾け、終始笑顔で相槌をうつ。背筋を凛と伸ば し悠然と構えるその姿はまさに絵になるようです。すばらしい男でした。

今となっては悔やんでも仕方ありません。彼の姿を思い浮かべながら永久のお別れとしましょう。

さようなら そして ありがとう 令和二年三月十四日

合掌

## ■ 松原正樹君の想い出 ■

赤羽 徳英(文理10回卒/元京都大学大学院理学研究科助教授 塩尻市在住)

3月9日突然の訃報に接し、驚きと共に又一人親友に先立たれたとの心痛で、その日は深夜までぼんやりとしておりました。今年の元旦にはお年賀を頂き、お元気で新年を迎えられたとばかり存じておりました。改めて顧みれば、昨年の物理同窓会総会ではお目にかかれませんでした。次の東京での総会では必ずお会いできると思い、その日を楽しみにしていたところです。昨年4月頃から不調だったのでしょうか。



松原君と知り合いになったのは、文理学部で物理学を学ぶようになってからです。 温厚で穏やかな語り、その上都会育ちらしい垢抜けした好青年というのが私の第一 印象でした。かような人が粗野な信州人の多い文理学部によくきたものだと不思議 に思ったほどでした。親しくなり雑談を交わすうちに、松原君は長野県木曽郡開田 村で義務教育や高校時代を過ごしたことを知りました。この温厚な青年が少年時代 には谷川で小魚を、裏山では野ウサギを追いまわして遊んでいたのかと勝手な想像 をして、おかしくなりました。

3学年の授業が終わりかけた頃、光学の講義中に向井教授がレンズの設計に関してポロッと口にした事がありました。受講生はそれには全く関心が無くボケーっとしておりました。只一人松原君はそれに興味をひかれ、三次まで計算したと言っていました。レンズの何についての計算だったのか全く記憶にありませんが、電卓すらなかった当時、解を求めることはゼロ近似でも大変な事でした。そのことが向井先生の耳に届いたかどうかは定かでありませんが、向井先生から光学の参考書(洋書)を頂いたと喜んで話してくれました。

卒業研究では、松崎研究室の暗室でオシロスコープを駆使し、私には全く分からない難しい測定を行っていました。またある時には、松崎先生から卒研に関する独語の論文を渡されたと言って、うれしいような困ったような顔をしていた事も有りました。光学の計算や精密測定に興味があったのでしょう。松原君はオリンパス光学工業に入社しました。

文理学部卒業後は進路が分かれましたので、お会いする機会はほとんどありませんでした。定年退職後になると、物理同窓会総会で毎回顔を合わせ、二次会まで同席することが恒例となりました。私達同学年生4人全員がそろったある二次会で、松原君は「まだ会社に出ている」と白状されたので、他の3人が口を揃えて、「会社のためにそんなに働かなくてもいいから、のんびりと余生を楽しめ」と悪口を投げかけたところ、松原君は其れには応えずニコニコしながらビールを口にしていまし

た。会社の為ばかりではなく、好奇心と探究心から何かの研究開発に取り組んでい たのでしょう。



3年ほど前に私共4人は無事傘寿を迎えました。しかしその後たちまち優秀な二人が先立ちました。病院通いの身でありながら酒を絶てない二人は後に残されました。 (2020年3月13日記)

## 大皿盛りの同窓会で多事争論が面白い

## ―県の森音研同窓会の中締め劇から―

今は昔・・松本の県の森をホームに 『文理音研』という音楽サークルがあ りました。

1950年(昭和25年)、松本高校音楽部から小部屋とドイツ製のピアノ(「ザイラー」の2本ペダル)が文理学部に譲られて、ピアノはなぜか「物理の備品」だったそうです・・。

1959年(昭和34年)、文理と医進の学生を中心に音楽サークルが誕生します。ピアノの人気を集めたまま、弦楽を中心に、フルートやギターに加えて歌もありました。ピアノの名前か



ら『ザイラークラブ』と名付けられたのですが、音楽なら何でもありだ から、やがて看板名は『音楽研究会』に変更されました。

羽田智惠子(文理学部社会科学科 16 回/早稲田大学公共政策研究所 東京都港区在住)



▲1960年、松本の翁堂での音研コンパ

この頃、昭和32年前後の創世期に入部した物理の専攻生には岡田光生さんをはじめ、専らピアノの練習に打ち込んだ松原正樹さん、ギタートリオで盛り上がった三上浩佳さんや清水邦男さんが活躍し、少し遅れて入った畔上十士靖さんには数々の武勇伝あり・・。

私が文理学部に入学し音研に入部したのは 1964 年(昭和39年)でした。



『名前が「音楽研究会」なのに歌の練習だけはどうしてですか?』と先輩に尋ねた記憶があります。その前に弦楽は医学部生に引き継がれ、やがて現在の「信大交響楽団」へ。ギターマンドリンチームは独立して今の「信大マンドリンクラブ」へ成長し、工学部の学生は長野で「グリークラブ」をつくって歌い継ぎ、残りが「音研」という名前のまま事実上の合唱団となりました。(音研はのちペレグリーナ合唱団を経て、現在は『信大混声合唱団』に至っています)

### ♪♪ 自ら背負ってきた「音研万年幹事」の長い道

私が卒業したのは 1968 年(昭和 43 年)。全共闘による学生運動が始まり、「東京から日本を変える」と美濃部亮吉革新都政が誕生した 1 年後です。大石内蔵助の元に馳せ参じる思いで東京都庁に入りました。

松本を離れ東京に出たあとも、在学中から親しかった音研の先輩たちと都心によく集まって飲み会をしたり、郊外にハイキングをし、お互いの結婚式にも参加するなどして、これが「音研同窓会」の原点になったのだと思います。また、実家が松本なので、帰郷するつど界隈のOBOGに声をかけて「しづか」で飲んだり歌ったりしていました。知らず知らずのうちに「万年幹事」の道を自ら背負うことになり、これが良かったかまずかったか・・。



▲1998 年、旅館すぎもとで

散発的に音研の世話役を始めてから30年。1998年(平成10年)に松本で『音研40周年の集い』を開きました。旧制高校記念館のカフェに全国から参集した30名以上の対面となり、「うわあ~!」とか「きゃあ~○さんだあ!」の声が響き渡った光景を鮮明に覚えてい

ます。

この時、0B は多様な学部に所属したことを考え、名称を『県の森音研同窓会』に変更し、2000 年(平成 12 年)にも続きを開催しました。そして、2002 年(平成 14 年)にはザイラークラブからの 43 年をまとめメンバーの多くから寄稿してもらってアルバム型の記念誌『森の仲間たち』を作成。今思えば同窓会が最も元気な時だったかもしれません。

#### ♪♪ つくることはできるが直して残すことは難しい

それから更に現在まで20年近く、(万年)代表幹事の中島嘉尚さん(松本在住の弁護士)と相談しながら、多くの仲間の協力を得て、いわば「万年幹事長」を続けてきたのですが、その間に一人二人・・と亡くなり、病気や高齢化で身動きのとれない先輩や仲間が増えてきました。情報交換をしながら080Gの現状を把握して名簿の更新をし、時折お道楽的に季節のニュースレターを出したり、松本に集まったりしてきましたが、私の力不足もあり物理同窓会のように組織化するまで手が回りませんでした・・。

今年の2月29日、NHKが『東京リボーン 巨大改修』のタイトルで首都高速道路や東京タワーの大掛かりな修復工事を特集しましたが、そこで強調された『つくることはできる。しかし直して残すことは困難だ』の説明に『ご尤もです』。

そうなのです・・・同窓会をつくり、たまに歌ったりコンサートや宴会を開くことは左程難しいことではないのですが、単発的に活動してきた小さな同窓会が『永続化の装置』(情報連絡網・ホームページ・役員組織・会費制・定期イベントなど)をつくろうとしても、音研 OB にはその発想や経験がないせいか、呼びかけても反応が殆どありません(苦笑)。

## ♪♪ 坊やいったい何を教わってきたの?

なぜ音研同窓会を『中締め』しようと考えたのか。

直接の理由は音研ではなく、私の出身母体(文理学部社会科学科・現在の経法学部)のクラス会にありました。私ごとですが、40代で東京のW大に学部から入学して大学院・研究所と今も20年近く在籍しており、政治家やジャーナリストなどウルサイ人たちが自由にモノ申す雰囲気の大学院同窓会で幹事長を経験したためか、同窓会感覚が相当変ってきたのかもしれません・・。



●イラスト:ニューロック木綿子

話を戻して社会科の年1同期会ですが、(近況報告でも)

「他の大学の話はしないで」と言われて驚き、本当に落胆しました。江戸や明治や戦前じゃ~あるまいに、しかも社会科学を学んだ学士ですよ。「(昔の) 坊や、いったい何を教わってきたの?」と、山口百恵の「プレイバック part 2」が自然に口をついて出る。

とっさに感じたのは 1990 年前後に長野県の教育レベルが≪知・徳・体ともに≫日本の底辺に落ち込んだ背景につながるタコツボ的な閉塞感であり、「モノ言わせぬ空気」です。信州人の DNA は優秀な筈ですが「昔は教育県だった」という過去の成功体験ゆえに外部(情報)への窓を閉ざしたまま「多様性を認めず小窓しかない屋形船」に今も乗り続けている人たちが少なからずいるように思えます。

福澤諭吉が 1875 年に「文明論之概略」で説き、私が直に学んだ師匠の筑紫哲也が最も重視した「自由の気風」と「多事争論」にはあまりに遠く、信大の同窓会にいても前向きになれないと思い、文理の東京同窓会からも遠のいて背負い続けた音研だけを残しました。

#### ♪♪ 中締めにドンデン返しありも大成功!

『中締め』の理由はもう1つ生じていました。現役に繋がっていない単体のため多くの会員が高齢化して、車椅子になり動けない、体力がない、心臓手術で遠出は困難、伴侶の介護があるなど・・。3月に他界された松原正樹さんからは昨年夏「肺腺症で肺機能が50%しかありません。呼吸困難に陥るので一切の会合を断念しています」と連絡を受けていました。現役まで合唱団の同窓会を一元化するには5年10年かかるだろうから、自分が元気なうちに『中締め』しようかなあ・・と。

直接連絡をとれる約 40 名の 0B0G に意見を聞いたら、どなたの反対もなく、松原 さんからは『中締めの宣言はとてもよいと思います。多くの会合が中途半端に終わっておりますので』と賛同の FAX をいただきました。



▲2019 年 11 月 中締め@東京。ところがここで大ドンデン返しが…

よし、「中締め」しようということで 2019@東京と 2020@松本の 2回に分けて「中締めイベント」を計画し、昨年 11 月、品川駅に近い拙宅を開放してミニコンサートと宴会を開きました。ところがです。共に事前の準備をしてきたのに、当日『中締め反対』の旗を掲げて広島から駆けつけてきた 1年後輩がいました。医学部 0B で国立病院の名誉院長でもある原田暁さんです。何たるドンデン返しでしょう! みんな何が起きたのか中々理解できず、しばらくはキョト~ン・・(笑い)。

原田さんからは、『やっぱかけがえのない仲間と会えなくなるのは勿体ない、コン

サートを目標に歌い続けたいし、「同窓会合唱団」をつくりたい』などの希望が出されました。元々が脳神経内科医として高齢者医療を専門にしてきたので、人生百年時代を見据えて高齢になっても目標を持ち続けることが何よりも大事との優しい提案でしょう。「中締め」をしようが二次会や三次会など何でもありと考えてきましたが、バトンを受け取ってくれるリーダーの出現は心丈夫であり、中締め案は大成功でした! きっと原田さんの熱意がエンジンとなって、ザイラークラブ以来 60 年の歌声を永遠の松明につないでくれることでしょう。

## ♪♪ 昔話より大皿盛りの同窓会で多事争論のすすめ

もし、『大学同窓会のミッションとは何か』と問われたら、『昔話中心の懐古で終わらせず、現役学生の活動を経済面や人脈紹介で支え、大学のブランドを高める応援団』と答えます。

信大は学部や研究活動には国の内外を繋ぐネットワークが様々あるでしょうが、 同窓会に着目すると、県内に競争相手が少ない環境だったせいか、信大純血主義に なりがちですね。

これが「東京六大学」みたいに目の前に切磋琢磨する学校が多数あると、研究活動、文化、スポーツ、音楽ならコンサートでも複数校が日常的に交流し刺激し合い、 ミックスで合同の同窓会も珍しくありません。

私が幹事のW大のクラス会で昨年九州に行った際、訪問の 先々で地元の市長や文化人・研究者・役所の幹部、マスコミ の記者など、官も民も政界も問わずゲストに招いて「多事争 論」し会食し、どこの大学出身だろうが「大皿盛り」を楽し みました。信大同窓会は人と話題が絞られる「小皿盛り」で 自由の許容度が低めだとしたら、diversity の発想で風呂敷 を拡げてほしいなあと思います。この意味でも次世代を応援 する探求心をもち、私のような信早のハーフにもしばしば声 をかけて下さる物理の同窓会は、器あるトップモデルといつ も畏敬の念を抱き続けていますので、引き続きお仲間に入れ て下さい。

最後になりますが、音研の先輩でもある松原正樹さんに感謝の思いを込めてご冥福をお祈りいたします。松原さんからバッハの「カンタータ 147番」(主よ、人の望みの喜びよ)は練習に打ち込み得意なピアノ曲だったと話を伺いました。ご自分でピアノ伴奏をつけて、音研の仲間が歌う声楽が天国から聴こえてきませんか?



●画:羽田智惠子/2002年に発行した記念誌「森の仲間たち」の表紙で、音研のロゴマークみたいに活用。「吉永小百合とトニーズ」が県の森で「勇気あるもの」(1966年)を歌っている光景

## 《第10回物理学生への就職セミナー特報 前編 》 就職委員、講師、学生 それぞれの感想

ことしのセミナー講師の3氏は、関西、関東そして地元塩尻から、松本の母校へ駆けつけてくれました。学部3年と M1 の院生あわせて 20 名近くが集まり、1時間半の講演、さらに1時間半の懇親会(フリートーキング)となりました。おのおのに感想を綴っていただきました。講演内容の詳細は次号以降に掲載します。

●日時: 2020 年 1 月 31 日 (金) 13:30~16:20 ●会場:理学部第 8 講義室 ●主催:信州大学理学部理学科物理学コース ●共催:信州大学物理同窓会

## 【就職委員から】通年採用やインターンの見直し(企業側)が始まるなかで

加藤 千尋(信州大学理学部理学科物理学コース 就職委員 宇宙線研究室教授)



本年も、無事就職セミナーを開催することが出来ました。 本年は19名の参加があり、気になっている点などについて、 講師の方々と懇談する機会を得られたことが良かったとの 感想を得ています。学生の就職に関しては、通年採用が始 まる、インターンの見直し(企業側)が行われている、等々 の情報が聞こえる昨今、どのような就業をして、どのよう な生活を営みたいのかということを考える機会は非常に有 意義であると思います。このようなキャリア教育は全学的

な取り組みとしても始まっており、専門の部署も立ち上がっています。当セミナー もそうした 機会のひとつとして開催した意義もあろうかと思います。

一方で、大学の日程、学生の履修予定共に密になり、授業以外のこうした場を作ること、参加することが難しくなっています。今回で10回目となったセミナーですが、これまでの成果を踏まえて、今後どのようにして学生にこうした機会を提供できるのか、大学のシステムを利用することも含め議論をはじめることが必要と思います。



## 【実業界若手から】演題:製品開発の現場と就職活動で重きを置いた事

講師・中島 寛人 氏 (理学 010S/素粒子理論研究室 東洋計器株式会社総合開発研究所 IoT 機構設計チーム チーフ) この度は就活セミナーの講師という大役をいただきありがとうございました。講 義内容を考えていく中で、自分自身がどのような考えで就活を行い、また今何を目 指しているのかを再確認するいい機会となりました。講師のなかでは最年少という ことで、人生譚として言えることは少なかったため、実際就活のなかでの経験を中



心に話をさせていただきました。少しでも参考になれば幸いです。

また、他の講師の方の話からも大変勉強させていただきました。自分には足りない考え方やキャリアを見て自分自身もこのような一人前のエンジニアとなっていきたいと感じました。就職活動で大切なことはその会社で働く自分をイメージする事です。会社を知り、そして会社に自分を知

ってもらうことで後悔のない将来の選択をしてください。仕事も遊びも両方楽しめるような、そんな就職活動の結果となるよう応援しています。

## 【実業界中堅から】演題:社会人として人生をスタートするための心構え

講師・今関 剛 氏 (22S/統計研究室 株式会社 イマテック 代表取締役 コンサルティング部 シニアコンサルタント)



今回、セミナーを通じて現役学生の方と触れあう貴重な機会をいただき、ありがとうございました。お話しする内容を詰め込みすぎ、少々わかりにくくなってしまった感は否めませんが、ITの普及と進化により、従来の社会の仕組みが時代遅れとなり、働き方にも変革が起きつつあることをお伝えできたのではないかと感じております。

また、私が学生の頃、普段の聴講や卒業研究の傍ら、多くの先輩や卒業生、著名な先生方との特別なゼミにて、たくさんの議論の場があったこともお伝えしました。理学部の教室に戻ってみて、大学時代の経験が、現在までの会社経歴や業務に大変役に立っていることを、改めて実感した次第です。

現在の就活環境は、インターンシップによる就職体験や就活イベントなども充実し、現役学生にとって、企業選びの労力は過去より減っているのかも知れません。一方、Entry Sheet の書き方や面接の準備等、書籍やネットに多くの情報が溢れ、3年生の早い段階から就活に動き始めなければならず、正解や見せかけなどに翻弄されやすくなってきているのではないか? と感じます。

ともすると、就職や将来についての考え方は、金太郎飴的な発想に陥りやすくなってしまいます。しかし、実際、懇親会にお集まりいただいた方々と直接お話しをした結果、そのような心配は払拭されました。

転職のきっかけや、仕事での時間の使い方に対する問いかけがあったり、具体的な研究テーマの方向性などについて、ご意見をお持ちの学生もいらっしゃいました。 私たちの経験談が、少しでも今後の参考になれば、大変嬉しいです。今後の皆様のご活躍を、期待&応援しております。

## 【実業界ベテランから】演題:会社に利用されるな、会社を利用せよ

講師・加藤 美孝 氏 (10S/電子研究室 日本アイ・ビー・エム株式会社 ASIC デザインセンター担当マネージャー)



就職セミナーの講師としてお招きいただきありがとうございます。一月の終わりごろといえば例年では厳しい寒さの頃なのですが、今年はそれほど寒くなく助かりました。これから就職活動を始める学生の方々にどのような話をすればよいか悩んだのですが結局自分の体験談になってしまい参考にならなかったのではないかと危惧しています。それにもかかわらず、ご清聴いただきありがとうございます。

私が学生の頃は就職活動でそれほど悩んだことはありません。それも私の時代は みんなまじめではなかったからなのでしょうね。それに比べて今の学生はまじめで 勤勉なのだと思います。真剣な顔で最後まで聴いてくれましたからね。

講演の後の座談会はとても有意義だったと思います。学生の方々からの質問に答えてあげることはとても参考になると思います。講演そのものよりもこちらの時間を多くとればこの企画もさらに良くなると思います。最後になりましたが、学生の方々の今後の活躍を祈念いたします。

## 【聴講学生から】 三つの疑問がやわらぎ、たいへん有意義でした

三島 勇斗(017S/信州大学理学部理学科物理学コース3年)

私はメーカーに就職希望の者で、今回 OB の方々に気軽に質問をできる場を設けてくださり、いい機会だと思い参加させていただきました。私が問うた質問は三つあり、一つは転職を決めたきっかけとは何か、二つ目は仕事の中で好きなこととやりたくないことのどちらから手をつけるべきか、三つ目は IT 業界に向く人材はどのような人かです。一つ目の質問には自分のやりたいことを行うため、二つ目の質問には好きなことから手をつけるべき、三つ目の質問には新しいことに臆さず、

それをどんどん吸収できる人という回答をそれぞれいただきました。

これら以外にも自らの経験を踏まえたうえでためになるお話をたくさんしてくださり、大変有意義な時間を過ごせました。今回お話してくださった内容を真摯に受けとめ、自分なりに社会人としての一歩を踏み出すための糧として、活用していきたいと思います。



▲講演のあと、別室で講師と学生の懇談会

## 【聴講学生から】 理学部は就職に不利と言われてきたけれど……

小池 由稀奈(017S/信州大学理学部理学科物理学コース3年)

私は、今回の就職セミナーは物理学コースの学生としてとても貴重な機会だったと感じます。大学に入学したときから、理学部は就職をするのは大変だと言われてきたので、就職に対する不安は他の学部生に比べて大きかったです。

特に、自分の研究が就職に使えるのかという不安がありました。しかし、就職された先輩 方の生の声を聞けたことで、理系だけでなく文系の企業に勤めるなど、社会の中での物理学生の様々な可能性を知ることが出来ました。また、様々な世代の方が 来てくださったので、就職活動や仕事の仕方、退職など、長いスパンでの職業人生を知ることが出来ました。もし今後機会があるのであれば、女性の方のお話も聞いてみたいと感じました。

## 理学部卒は工学部などに比べ就職に不利か?

今回のセミナーに参加した小池由稀奈さんの「理学部は就職に不利・・・」
の一文を読まれた戸田泰行さん(4 T/工学部合成化学卒/礎電線(株))
から、かつて勤務された(株)フジクラ(信大から累積 60 人入社、物理卒では3人(竹永勝宏さん 1999 年、藤田真司さん 2006 年、刈込富士男さん 20
07年))で15年間信大の求人担当。工学部での合同説明会へは毎年参加され、毎年1人以上の入社実績を持つ経験からのご意見をいただきました。



#### ≪総合的な印象では≫

工学部に対して理学部の学生は、優秀。しかし明るいアピール力が不足。

①人事面接:まじめな受け答えが好印象。

②技術面接:学力優秀。英語力はさらにプラス印象。

③役員面接:役員の意地悪質問を明るく切り抜けるのに苦戦。

#### ≪面接時のアドバイス≫

暗い印象は不利。面接時は無理をしてでも、にこにこした顔で、 目をよく見て、はっきりした声での受け答えを。質問された事を、 よく理解し、余分な事を言わず、的確な回答が、できること。



#### ≪求人担当としての思い出、反省、所感≫

#### ☆苦い思い出(理学部○○科の女子学生の場合)

人事部としては、この女子学生はとても優秀なので採用したい、との意向でした。 当然、人事・技術面接はパス。役員面接でNG。懸念していた暗い印象も影響か。 このような学生は、研究者としてとても優秀な場合が多いのに、とても残念でした。 反省点として、学生が来社時、直前にも面接練習をすればよかった。面接でのパターン はおよそ決まっている。地方の学生は、面接の場数を踏んでいなく、要領を得た遣り取り が不慣れ。また、研究室の繋がりで強い推薦があれば、採用されたかもしれない。

#### ☆嬉しい言葉

研究室の後輩で、現在活躍している△△君と、展示会で偶然に久し振りに会ったところ、「フジクラに入れたのは戸田さんのお陰です」と思ってもいない言葉がありました。

#### ☆変わらざるもの

昔はタフな学生が好まれた。現在は優秀な学生が好まれスマートだがタフさに欠ける。 信大卒は、適切な学力、素朴で豊かな人柄、仕事熱心。同窓会も毎年実施中です。

## リレーコラム 💯

## 想いを半世紀前に遡らせて

信州大学創立70周年・旧制松本高等学校創立100周年、誠におめでとうございます。「信州大学が永遠に研究、教育と勉学の場であり、若人の活躍と成長の舞台であり続けることを期待します」と御祝の言葉を寄せました。我々が信州大学に入学した昭和43年に旧制松本高等学校創立50周年記念事業があり、メガバンクの頭取の方の記念講演を県の森の旧人文学部講堂で聴き、松本の街を提灯行列で祝ったことや県の森に「松本高等学校跡 我ら乃青春 ここに在りき」の碑が建立された。旭町キャンパスには、教養部の真新しい建物が目を引くが、理学部の建物は木造で、冬に達磨ストーブの亜炭や石炭に火がつきにくく、煙い教室で講義を受けた。 (信州大学理学部同窓会報33号/2019年3月発行より改転載)

<u>飯沼</u> 和男(3S/物性研究室 京都大学認定「学校経営ディレクター」・信州 大学物理同窓会副会長 新潟市在住)

#### ☆★ 昭和43年入学のころ

理学部の建築は、昭和44年に半分、翌年に残りの部分が漸く完成した。当時は 荒野に教養部の建物が一際目を引いていた。また、昭和43年に『どくとるマン ボウ青春記』が刊行され、ベストセラーになった。この本も含め「どくとるマン ボウ」シリーズは当時、旧制松本高校から東北大学医学部へ進学し、精神科医で 『夜と霧の隅で』で芥川賞の作家、北杜夫(斎藤宗吉・歌人斎藤茂吉の次男)著で ある。(昨年刊行「信州大学・松本高等学校 学生歌・寮歌集」「人の世の」作詞者)



登場人物に松崎一(物理) 先生、担任の池田雄一郎(生物・あだ名:メダカ)

先生らが登場し、我々は松崎先生に物理を教わり、池田雄一郎先生は教養部長、後に大学長に就任された。ひょんなことから池田先生のお宅に伺い、先生が主催する 禅の会に約一ヶ月間参加し、禅の講義を受け、座禅をさせていただいた。

一方、旧制高校の雰囲気に憧れ、大きな影響を受け、特に読書にのめり込み、食るように読み、マルタン・デュガールの「チボー家の人々」、トーマス・マンの「魔の山」「ブッデンブローク家の人々」等の印象が残っている。これも「どくとるマンボウ青春記」に登場する旧制松高ドイツ語の望月一恵先生の訳でトーマス・マン等の書が岩波文庫で刊行されており、そのことから手に取った。一方、毎日新聞社刊の「同期の桜」に掲載の学徒出陣した林尹夫(京都帝国大学文科西洋史科)の文に惹かれるものを感じ、筑摩書房新社刊林尹夫著「我が命月明に燃ゆ」を購入し、読み進む内に大きな影響を受けて、彼の愛読書であるこれらの本を読破し、林尹夫の心に浸ったことが思い出される。

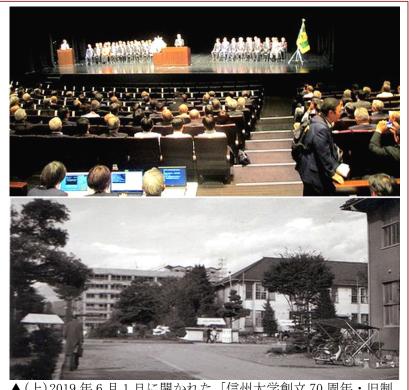
## ☆★ 自然科学研究会

もう一つは「自然科学研究会」である。理学部物理学科に入学したものだから、「自然科学」の匂いに誘われ、入会したと思う。先輩に岡田菊夫氏、村上和幸氏、 斎藤秀夫氏、そして、同じクラスの神田健三氏らとの思い出がある。勿論、現理学 部同窓会森淳会長の下宿にも訪ねたことも多く、1年生の頃は和気藹々の雰囲気だ

った。新入生歓迎会は電車で「姨捨」 付近を歩いたり、夏合宿で「妙高笹ヶ峰」でセミの羽化を村上和幸氏が時間 をかけてカメラで撮影するのを見たり、 散策途上で笹をかき分けて「鶯の巣に 卵」を写真に収めたりしたものである。

また、春先に先輩3人と神田氏と私が、逆転層を観測するとグラウンドでサーミスターをつけた風船をあげ、グラフに逆転層がはっきりと現れたのには感動した。岡田氏は「小気候」の書籍を持ち、それらから名古屋大学大学院水質科学研究施設へ進学したと聞いている。神田健三氏は、樋口敬二名古屋大学大学院水質科学研究施設教授

(当時、後に中部大学教授、他界)が 新聞で「日本に氷河があるかについて、 全国調査に加わってほしい。」に呼応し 北アルプス穂高連峰涸沢雪渓を調査し



▲(上)2019年6月1日に開かれた「信州大学創立70周年・旧制 松本高等学校100周年記念事業」記念式典(まつもと市民芸術館) (下)1968年、建設中の理学部校舎(中央奥の建物で南側から撮影 /写真提供・2Sの小林善哉さん)

ようと言い出した。 3 S の物理学科の十数人が私を含め参加し、それが、記念すべき第1回北ア穂高岳涸沢雪渓調査で、表面積や傾斜を測量し、中腹に2 m程鶴嘴で穴を掘り、断面のゴミの線などを調べ、雪の層から積雪の年数を計測した。

### ☆★ 大学紛争

昭和44年度になり、学生運動・大学紛争が信州大学でも激化していった。私は5月の連休を利用して、涸沢に入ったり、神田氏と新潟県長岡市の旧運輸省雪害研究所(現独立行政法人防災科学センター:後に4Sの佐藤篤司(北海道大学大学院低温研究所へ進学)氏が所長)見学に行ったりしていたが、学生間での論争の渦中に入り込み、自然研と疎遠になっていった。今から思えば、少し惜しい気がする。1年生の冬には、信州大学乗鞍の研修施設で、北大低温研の院生である牛木氏を招き、雪について研修合宿を組んだことも懐かしく思い出される。

所謂、教養部での出来事を記載させていただいた。この後の時間には専門の勉学、 先生方や友人たち、そして、その事柄と並行して大学紛争が係わり、様々な想いが 去来する。それを引きずり社会に出て、職に就き、ここでも葛藤や職のあるべき姿、 それらとともに人生の生き様を貫いて今がある。

今、新潟に戻り、教員生活45年(公立高校・県及び市の行政職・私立高校に勤務し、管理職等を20年)を一昨春に終え、2年前に母の葬儀を出し、祖父母・父も既に他界している。教員生活で私自身も、悪性リンパ腫(癌)を患い、更に右腎摘出で、1年間療養生活を送り、復帰したが、同時期に悪性リンパ腫で私よりも若い校長は他界した。療養中に見舞においでいただいた先輩の校長から「神様は貴方に使命を与え、そのために生かした。」と告げられ、その気になって現在の私が存在し、私の「死に損ない人生」はまだ続く。これまでの教職一筋の経験を系統的・理論的に整理したいと「京都大学私学経営アカデミー」で学び、資格をいただいた。これからの余生を充実させ、朗らかに楽しみたいと思う。

## | | 信 | 州 | 大 | 学 | 東 | 京 | 同 | 窓 | 会 | 第 | 12 | 回 | 総 | 会 | | 開 | 催 | の | 報 | 告 | |

全学部の OB、OG150 名近くが一堂に! 2月に東京・市ヶ谷で東京同窓会

近藤 一郎 (理学 12S・物性論研究室/信大東京同窓会副会長)

2020年2月8日(土)、信州大学東京同窓会第12回総会/懇親会は150名近くの参加者を集めて開催された。うち工学部卒が33名、経法学部卒が28名、文理学部卒が16名、ちなみに理学部卒の参加はわずか4名だった。当同窓会は、信州大学全

卒業生を対象に、講演会(講演2本)、総会、懇親会の3部構成で開催される。

### ▲▼ 濱田学長に博士課程は理系しかないのはどうしてか、との質問も…

最初の講演を、人文学部経済学科卒、山と渓谷社「山と渓谷」元編集長の神長幹雄氏が務めた。演題は「松本から辺境の地へ一『山と人と本と』編集の現場から学んだもの」。各学部持ち回りで卒業生から講師を選んでいるが、講師の出身学部の卒業生の出席を増やす狙いがあるため、もともとの参加者が少ない理学部卒業生が講師に選ばれたことがない(文理学部卒を除く)。

二つ目の講演は濱田学長による最近1年 間の大学全体の活動報告。今回から、濱田



▲信州から駆けつけた学生オーケストラの演奏もあり、華やいだ雰囲気につつまれての懇親会でした

学長に対して会場から質問を受け付ける時間枠を設けた。質問のひとつが大学院の構成について。信州大学が、8 学部、4 修士課程(総合人文社会科学研究科、総合理工学研究科、医学系研究科、専門職大学院(教職))、1 博士課程(総合医理工学研究科)から構成されているところで、博士課程に理系しか存在しないのはどうしたものか、と東京同窓会長が問うた。

急速に進む国の補助金圧縮・人口減に伴う定員削減の中で、旧国立地方大学には、 地域貢献やユニークな研究分野での、いわゆるめだつ活動が課せられている。独自 性のある研究力を備えるためには博士課程大学院の充実が必須だ。そのうえで信大 の博士課程修了者が若手教員として信大に勤める流れを作ることを、信大を母校と しない方が多い学長・副学長に対して期待するしかない。

## 卒業にあたり信大生活を振り返る

【この3月の卒業生に信州大学での学生生活を振り返っていただきました。卒業式、 は中止となりましたが、仲間との思い出を胸に巣立っていきます。おめでとう。】

#### ■ あっという間の4年間

◎ 松下 凌大 (理学 016S/素粒子論研究室)

私はこの春卒業するのですが、その"実感"というものが全然湧いてきません。

入学してからの4年間はあっという間に過ぎ去りました。最初は右も左もわからず、何もかもが不安でした。しかし、徐々に環境に慣れていき、友人も増え、物理

が楽しくなりました。友人達となにげない会話をしたり、物理について話し合ったりするのはとても楽しい時間でした。どんな時でも、物理の議論につきあってくれる友人や先生方ばかりで本当に恵まれた環境でした。

4年間お世話になった先生方、友人達には感謝をしきれません。私にとって、皆さんと過ごした時間はかけがえの無いものになりました。物理学コースの人々は皆いい人であり、沢山の友人ができました。卒業によって大多数の友人達と離ればなれになってしまい寂しくなりますが、それぞれの場所で活躍し、またどこかで会えることを楽しみにしています。

私はこのような文章を書くのがとても苦手なので、"当たり障りのないこと"を書いておきました。ここにはあまり書きませんが、6階のラウンジで何度も開催した飲み会はとても楽しかったです。また他の研究室にも関わらず、飲み会に快く参加させていただいた先生方には感謝しています。

## 成績優秀者の表彰

L.....

物理学コースから、今年度は次の成績優秀者が表彰されました。当会からは副賞記念品としてガラス製の「子ふくろう」(右)を贈りました。安部 草太、安藤 叡史、杉森 加奈子、立花 建、中野 真之介、永瀬 慎太郎、古市亜門、谷澤 君平の8名。おめでとうございました。



$\Gamma$	$\neg$										
I		N	F	0	R	M	A	T	I	0	N

|□ 第2回信州大学大学史資料センター企画展「信州大学誕生ー |□ 残された文書が語る誕生の舞台裏-|

信州大学は、1949 (昭和24) 年、長野県内の複数の高等教育機関を母体に設立されました。本企画展は、大学に残された関係資料から、誕生の舞台裏を紹介します。

信州大学設置への道のりは明治期まで遡ります。長野県内各地に高等教育機関が設立されるなかで、信州大学の設置運動も大きな盛り上がりをみせ、戦時下にも止むことはありませんでした。

第二次世界大戦後、新憲法、教育基本法の下で民主化が進められ、大学も新たな 出発を求められました。戦前設立の高等教育機関のなかには、単独で大学設置(昇 格)を目指す動きもありましたが、1県1大学とする文部省の方針が示され、信州 大学は、6学部からなる総合大学として誕生することになりました。 大学設置に向けて膨大な書類が作成され、1948年7月、申請書が文部省に提出されました。この時の準備書類は、「信州大学創設関係資料」として11冊に綴られ、大切に保管されています。1948年秋から冬にかけては、学生の募集準備として、「大学案内」や「入学志願者募集要項」が作成されました。

1949年5月31日、国立学校設置法が公布・施行され、ついに新制国立信州大学が発足します。開学記念日は6月1日としました。設置準備から開学に至る責任者であった松本医科大学学長の竹内松次郎は、1949年5月、「信州大学の構想」と題した随想を記しています。

信州大学の設置は、軍国主義から民主主義へ、軍都から学都へと変わろうとする社会の象徴となったのです。

1950年10月30日、開学式が行われ、高橋純一初代学 長の挨拶をはじめ、各界からの祝辞が寄せられ、講演会、 祝賀会も開催されました。

本企画展では、信州大学誕生までの経緯を物語る資料 現物を多数展示します。この機会に、信州大学中央図書 館をおたずねください。受付でお声をかけていただけれ ば、どなたでも入館できます。

(信州大学大学史資料センター特任教授・福島正樹)

■場所:信州大学松本キャンパス(松本市旭3)の中央

図書館

■期間:3月18日~5月27日 開館時間は平日午前8時

45分~午後10時 土・日曜、祝日は午前10時

~午後7時(3月中は午後5時まで)

■入館無料



信州大学創設関係資料(1943~51年) 大学史資料センター蔵



随筆 竹内松次郎「信州大学の構想」(1949年5月) 『月刊信毎』に寄稿した随筆の原稿。設立準備の過程で考えた構想が記されている。 大学史資料センター蔵

(市民タイムス 3/13 より)

## News

## □ 理学部同窓会「会計問題検討会」を設置して赤字問題を討議

理学部同窓会の財務状況がここ数年大幅に悪化していることをうけて、過日「会計問題検討会」が設置されました。2月14日に開かれた第1回の会合では、会長による概略説明のあと、各委員から出された素朴な疑問や意見について全員で話し合いました。経費削減には役員の方々がすでにこれまでもかなり努力されているとのことで、なかなか「これを削りましょう」とすぐに提案できるものはないように思えますが、たとえば「会長旅費の削減」「学部への教育助成の減額」「会報の発行回数の削減」などについてもこれから検討していくことになりそうです。次回は6月に開催予定です。

(報告:松本成司/20S 理学部同窓会幹事)

#### <再掲>■「同窓会費」は終身会費として1万円。『会計細則』決まる!■

\_\_\_\_\_

- 1. 同窓会費は終身会費として1万円とする。一括払いを原則とするが、本人からの申し出があった場合は事務局長が分割払いを認めることができる。
- 2. 事務局長名で金融機関に同窓会の口座を設ける。事務局長が通帳・印鑑を管理する。会計担当がカードを管理して口座からの出し入れなどを行う。
- 3. 在校生からの同窓会費徴収は、事務局が徴収日を決めて実施する。徴収後、在校生の会費支払い者 リストは、すみやかに会長ほか、会計担当および関連事務局員に伝達する。
- 4. 金融機関への振込み手数料は会員の負担とする。
- 5. 会計担当は、年1回開催する総会を利用したり、メールで呼びかけたりして、 卒業生からの会費 徴収に努める。
- 6. 毎年開催の同窓会総会における参加費の徴収など会計管理については、その年の幹事が担当し、事務局が補佐する。必要経費は事務局から事前に仮払いのかたちで支出できる。幹事は開催後しかるべく早く収支を事務局に報告し清算する。
- 7. 会計年度を4月から翌年3月とする。会計はすみやかに決算報告を作成して会計監査担当から監査を受ける。
- **Τ**ξ

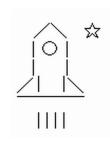
- 8. 本細則の改正は総会で行う。
- ▼下記いずれかの口座に | 同 | 窓 | 会 | 費 | のお振込みをお願いします!
- ◆郵便局の場合/通常郵便貯金 記号:11150 番号:20343411 口座名義:信大物理同窓会 代表者 武田三男(たけだみつお) 住所:390-8621 松本市旭3-1-1
- ◆銀行の場合/八十二銀行 信州大学前支店 店番号:421 普通預金 口座番号:650215 口座名義: 信大物理同窓会 代表者 武田三男(たけだみつお) 住所:390-8621 松本市旭3-1-1

\_\_\_\_\_

## 

◆・・「ウイルスといえば、ペストの蔓延で、自宅待機を強いられたニュートンを思い出す。外との接触をほぼ断たれた中で、彼は、万有引力の法則を発見しただか、それを記した「プリンキピア」という本を書き上げたか、する。調べれば、すぐわかることだか、もともとひきこもり傾向にあったニュートンだが、ペストによって、機会ができ、イノベーションが生まれたと、前向きに解釈する。そのニュートンが、自分はただ巨人の肩に乗って、遠くを見渡せただけだと述べて、それが、ティコ・ブラーエの精密な惑星挙動の測定データや、ケプラーなどの先人を指すのだと思っていた。この言葉、実は、ニュートンの言葉ではなかった。山本義隆の「十六世紀文化革命」 2のP6 2 7 に記されているが、12世紀、シャルトル学派の創始者ベルナルドゥスの言葉のようだ。「われわれは巨人の肩に座った倭人のごときものである。われわれは巨人よりも多くの、より多くの、より遠くにあるものを見ることができるが、・・・・・それは巨人の大きさゆえに高いところに持ち上げられているからである」。ウイルスで、外出がままならない中、読書が進みそうだ。 (AK)

- ◇・・Bad News First という言葉があります。異常が発生したら、悪いニュースほど早く上司に報告することが風通しのよい組織作りには必要である、ということ。ただ、都合の悪いことほど、聞こえない、聞かなかったことにする人々は存外沢山いるものです。新型コロナウイルスでもそういったことがなかったのか。「挨拶をしよう」など当たり前のような気がしますが、社会に出てみると決して当たり前のことでなかったりします。だから繰り返し「挨拶を」と言われ続けます。前代未聞の卒業式、学位授与式を迎えられていた方々には、当たり前のことが当たり前である社会を作って欲しい、そして当たり前の上に、独創を極めて欲しいと思います。御卒業おめでとうございます。 (NA)
- ★・・今回の通信には物理同窓会以外のお二方からの貴重なご寄稿を頂きました。一つは就職セミナー報告の中でご経験に基づくアドバイスをお寄せ頂いた工学部 0B の戸田さん (4T)、もう一つは県の森発祥の「音研」の歴史を綴って頂いた文理社会科学科 0B の羽田さん (文理 16 回)。物理会の人の輪が一段と広がりつつあることに感謝致しております。特に、羽田さんの作品からは、当同窓会の副会長として会の基礎づくりに大きな貢献を頂きながら早くも鬼籍に入られてしまった松原正樹さん (文理 10 回)が音研にてピアノ演奏をされていたことを初めて知り、優秀な光学設計者として同業からの憧れであった方の存じ上げなかった素晴らしい一面を知ることができました。これこそ良い意味でのクラスター拡散であり、このような人の輪の一層の広がりを願っております。 (HT)



●・・物理学は自然科学のカテゴリーだが、では自然科学は? 実は哲学の一分野と分類されるという。来田さんが、19世紀の哲学者ニーチェ全集を読破されたという。大きな驚きであった。おくればせながら、小生も代表作『ツァラツストラはこう語った(かく語りき)』(岩波文庫)を読み始めた。難解であるし、強烈なメッセージについていけないところも多い。その時代背景として戦争が多発し、ペスト、コレラなどのパンデミックがたびたび襲った19世紀のヨーロッパがある。ニヒリスティックで実存主義のさきがけ、「神は死んだ」

の名言を吐いたニーチェの精神生活と葛藤。混沌のなかに、次世代の量子力学と一致する概念がみられるという。来田さんが次号当会報で発表する『ニーチェと物理学』。興味深い。

●・・退職される竹下先生の手記『退職に際した雑感』によって、先生のおいたちと研究生活の歴史を知ることができた。なかでも、小学生のころからラジオ少年だった点は小生も同じだったので、親近感を覚えた。また、教え子大下さんの原稿から、先生がオフロードバイク乗りであったことが分かった。これまた、小生も同じである。ヒッグス粒子発見に大きく貢献され、論文引用数は信州大学ではずば抜けてトップ。30年前に見ず知らずの信大にたった一人で乗りこんで、今日を築かれたパワーと熱意には敬服するしかない。退職後も特任教授として残られるという。ご活躍を祈りたい。(MT)

- 信州大学物理同窓会会報 0072 号 (2020 年春号) SUPAA BULLETIN No. 72 ●
- 2020年3月23日発行 ●
- □ 編集・発行/信大物理同窓会事務局
- □ 編集長: 髙藤 惇 □ 副編集長: 來田 歩 □ 発行人: 太平 博久 《編集委員》髙藤 惇(2S) 渡辺 規夫(4S) 太平 博久(6S) 足助尚志 (17S) 來田 歩 (22S)
- ■当会報のバックナンバー閲覧サイト: http://www.supaa.com/kaiho/index.html
- ■当会へのお問い合わせ先: http://www.supaa.com/postmail/postmail.html

(C)信州大学物理同窓会事務局 無断複製・転載を禁ず